宮城教育大学学生のジェンダー意識の現状と課題

――一般大学生との比較調査から――

*数　見　隆　生・**土　井　　豊・***伊　藤　常　久

The present states and problems about gender awareness for students of Miyagi university of education.
――based on the compared investigation with general university students――

KAZUMI Takao, DOI Yutaka, ITO Tsunehisa

要　旨

本研究は、将来教員になることを志望している教育大学生のジェンダー意識について、一般大学生との比較によって、明らかにしようとするものである。

調査の結果、宮城教育大学の学生は、一般私立大学生に比べて、家庭の生育環境がジェンダーにとらわれない雰囲気で育っている傾向があった。そのため、宮城教育大学の学生は、一般大学生に比べて「男は外で働き、女は家庭を守る」の性別役割分業意識は薄く、男女共同参画社会への意識は比較的高いといえるだろう。ただ、結婚して子どもができた場合、「子どもの幼少期は母親は子育てに専念すべき」とした者が、男女共に約半数いた。

性差観意識についても宮城教育大学の学生は、一般大学生に比べて男女共に低く、男女の違いをそれほど意識していない傾向があった。宮城教育大学において、３年前よりジェンダーに関する講義を開設し、学生のジェンダー意識に働きかけを始めているが、教員の資質としてのジェンダー観・センシティブな感覚をどう磨いていくか、本学における今後の課題であろう。

Key words：教員養成大学学生
学生のジェンダー意識
学生の性差観意識
教育とジェンダー

１．本研究の目的と方法

宮城教育大学のカリキュラムに「人間と性」という授業科目を教養科目の一つとして開設したのは、1994年度である。それまでは、一般保健体育科目の「保健理論」（半期必修）の中で数回のみ性に関する内容を取り上げていただけだった。性に関する独自科目の開設に踏み込んだのは、若者の性意識・性行動が大きく変化してきている中で、将来教員を目指す教育大学生の間にも同様の傾向が広がっていることに気づき、近い将来男女の生徒たちと向き合い、性の教育にも関わるべき教員の卵たちに、人格にかかわる教養教育の必要性を感じたからであった。とりわけ、内容的には、“性に関する健康（避妊や性感染症予防等）”を越え

*　宮城教育大学教育学部保健体育講座
**　東北生活文化大学家政学部
***東北生活文化大学短期大学部

た“人間と性”、“生き方と性”、“社会と性”等の課題を意識させたいと考えたのである。そして、そのシラバスの一部に「性とジェンダー」の内容も組み入れて扱ってきたのだった。[1]

その後、男女共同参画社会の動向や男女共学の学校が増え、学校社会の中でもジェンダーを意識すべき状況が広がってきたことや、新聞紙上等で教員のジェンダーに絡む不祥事などが生じている状況（DV問題等）にも鑑み、教員養成教育の中でジェンダーに関して総合的に扱える講義を組めないものかと考え、数名の学内教員等[2]との協同の下、「性・文化・ジェンダー」の科目を2007年度より、「人間と性」の講義とは別に開設したのである。

こうした経緯のなかで、教員養成大学に学ぶ学生のジェンダー意識はどうなっているのか、またどういう課題があるのかを探るべく、一般私立大学生との比較による第一次アンケート調査を開始した。そして、ジェンダーの授業を遂行する中、二次調査として、そうしたジェンダー意識に影響を及ぼす要因や性意識・性行動との関連、ならびに授業で学ぶことを通しての学生たちの意識の変容についても探りを入れてきた。

本稿では、そうした一次・二次の調査を踏まえて分かり得た知見について整理・報告するものである。

１）第一次調査について

一次調査はジェンダーに視点を当てた調査であり、宮城教育大学では2007年５月～６月に、一般大学では同年５月～７月に行なった。どちらの調査も各大学での講義の際に行ない、回収率は100％である。調査対象は、宮城教育大学に在籍する学生357名（男142名・女215名）と比較対照する一般大学（仙台市内の私立大学５校）に在籍する学生697名（男269名・女428名）である。平均年齢は、宮城教育大学学生（以下、宮教大生と略）が男19.2±1.1歳・女19.0±1.0歳（１・２年生が男80.3％・女80.0％）であり、一般私立大学学生（以下、一般大生と略）は男19.2±1.3歳・女18.9±1.0歳（１・２年生が男86.6％・女87.8％）であった。

２）第二次調査について

二次調査は、主に性意識・性行動とその背景・要因に関するものであるが、それに性差観意識やジェンダー意識に関わる問いも組み込んだものである。調査は宮城教育大学では2008年５月～６月、一般大学５校では2008年６月～８月に行った。本調査も大学での講義時に行い、回収率は100％であった。調査対象は、宮城教育大学に在籍する学生401名（男156名・女245名）と一般大学（仙台市内の私立大学5校）に在籍する学生1,055名（男437名・女618名）であった。平均年齢は、宮教大生が男19.5±1.5歳・女19.4±1.4歳であり、一般大生は男19.3±1.4歳・女19.0±1.1歳であった。

一次調査も二次調査も無記名自記式でのアンケート調査であり、本人の了解のもとに行った。

集計・分析は、調査項目毎に大学種別・男女別に集計し、回答の割合等の質的変数についてはχ^2検定、得点等の量的変数には対応のないｔ検定をそれぞれ行った。解析にはSPSS Version 17.0を使用し、いずれも危険率５％以下をもって統計的有意とした。

２．ジェンダーと教育に関する問題状況と日本での歩み

世界に視野を置くと、ジェンダーに絡む教育問題はまだまだ重大事である。ユニセフの「世界子ども白書2007　女性と子ども」によると、中国やインド等の人口削減政策を取っている国では５歳未満の男児の割合が異常に高いことを根拠に、女児の堕胎と新生児殺害が行なわれているのではないかと指摘している。また、世界の児童で、学校に通えない男児を100とすると、女児は115にのぼるという。開発途上国では初等教育に就学する女児の５人に１人は修了できていない。開発途上国では、中等教育を受けられるのは43％だという。初等・中等教育を受けた子は、将来５歳未満で子どもを死なせる率は半分であり、初産年齢を遅らせることになり性と健康の課題も上昇するという。また、思春期の子どもの発達にとって大きな脅威になっているのは、虐待・搾取・暴力・そして性と生殖

1　数見隆生・村口喜代「宮城教育大学における人間と性の授業」（授業テキスト冊子）第１～３集　1993～2005年
2　メンバーは斉藤千映美（生物学）・菅野仁（社会学）・中地文（児童文学）・小塩さとみ（音楽学）・佐藤雅子（舞踊学）・木下英俊（スポーツ学）・田中新治郎（体育教育学）・村口喜代（女性クリニック医師・非常勤）・数見隆生（教育保健学）

に関わる健康の問題である。毎年、1,400万人の思春期の女子（15～19歳）が出産し、推定180万人の女子が商業的性労働に従事させられているという。[3]

日本では、今でこそ高学歴社会となり、こうしたジェンダー・ギャップは小さくなっているものの、一昔（約１世紀）前までは尋常小学校しか出ていない者が大半であったし、家父長体制の中、家庭の中にも明確な男尊女卑思想が根付いていた。「赤とんぼ」の歌に「15で姉やは嫁に行き・・・」の歌詞があるように、女子は早婚で子づくりと家事に専念させられた。当然十分な教育を受ける機会は制限されたわけである。

戦前は「男女７歳にして席を同じゅうせず」といった男女の隔離教育が行われたが、戦後は、教育基本法によって、男女の機会均等がうたわれ、その第５条に「男女はお互いに敬重し、協力しなければならないものであって、教育上の男女の共学は認められなければならない」とされた。これが、戦後の第一ステージとしての男女平等教育の始まりであったといえる。

その後、第二・第三ステージへと進展させてきた日本の状況について、亀田温子はほぼ次のように言っている。[4]第二ステージは、戦後の教育改革の建前の中で、隠れたカリキュラム（hidden curriculum）として存続してきたジェンダー問題に対する気づきとその修正を始めた昭和末から平成への移行期のことである。出席簿の男女別や順番、「君」と「さん」という呼称問題、制服・体育着・かばん・上靴等の色の区別、体育や保健での別習問題、給食・掃除の役割分担、児童会・生徒会での男女の役割区別、教師の無自覚な男／女らしさを求める接し方、等に関する見直し議論が広がった。また、全国各地で男女共学化の動きが生じ、広がりもした。最近の第三ステージでは、隠れたカリキュラムではなく、フォーマルなカリキュラムの中で、ジェンダー教育のカリキュラム開発が始まり、男女共修での授業の方法（男女による討論など）の改善や教師の言葉の使い方の問題等、あらゆる面での見直しや試みが始まっている。総合的学習の時間が設けられ、人権・性・平和・異文化理解・福祉といったさまざまな現実課題にジェンダー問題が絡んでおり、そうした課題を取り上げる教育場面も広がった。

また、こうした教育現場における実践的動きに平行して、80年代後半から90年代にかけてジェンダーに関する沢山の出版物が出され始めた。[5] 大学等においてもジェンダーに関連する講義を行う大学が増えたが、教員養成大学で、将来教員になる学生の資質を考え、明確なジェンダーのテーマを掲げてカリキュラム化し、実践を行っている大学はまだ極めて少ないように思われる。亀田温子は、全国54国立大教員養成学部における「ジェンダーに少しでも関わる教科目」の出講状況を1997年に調査しており、25大学で扱っているとしているが、教職教養や家政学・教科教育・社会学・家族論等の中での関連的扱いである。[6]本学で開講した「性・文化・ジェンダー」の内容は、９名の教員の各専門をジェンダーに焦点化してシラバス化したものであり、それは他の教員養成大学では扱われていない斬新的なもののように思われる。[7]・[8]今回の調査は、こうした教員養成大学におけるカリキュラム化と実践的発展の基礎資料を得るためのものでもある。

３．第一次調査の結果

１）対象者の属性について

調査対象者の出身校は、公立校出身者は宮教大生の男92.4％・女87.6％、一般大生の男70.5％・女70.2％であり、男女共に宮教大生の方に公立校出身者が多かった。出身校が共学か別学かでは、共学は宮教大生では男69.9％・女70.5％、一般大生では男85.6％・女66.2％であった。男子では宮教大生の方が一般大生に比して男子校（別学）出身が多く、女子では一般大生の方に女子高（別学）出身が比較的多かった。居住形態では、家族との同居（自宅）は宮教大生の男33.1％・女

3　松本清一『生きる知恵としての性教育』ｐ27-32　自由企画・出版　2009
4　亀田温子「ジェンダーが教育に問いかけたこと」『学校をジェンダーフリーに』p23-38　明石書店　2001
5　89年に初版出版された江原由美子らの『ジェンダーの社会学』新曜社に教育問題も論考されている。99年には藤田英典らによる『ジェンダーと教育』（世織書房）の理論の大作が出され、同年現場の実践をまとめた小川真知子らによる『実践 ジェンダー・フリー教育』（明石書店）が出されている。
6　亀田温子「教師のジェンダー・フリー学習」『学校をジェンダー・フリーに』ｐ322-327　明石書店　2001
7　数見隆生ほか『宮城教育大学における性・文化・ジェンダーの授業』教材・資料集　全81ページ　2007
8　数見隆生ほか『宮城教育大学における性・文化・ジェンダーの授業』実践報告集　全52ページ　2008

45.1%、一般大生の男64.5%・女60.5%であり、男女共に一般大生の方が多かった。

2）対象者の生育環境等について

「子どもの頃、家族の中に大黒柱的な存在の人がいたか」の問いでは、「明らかにいた」としたのは宮教大生では男39.6%・女35.8%で、一般大生では男46.6%・女41.7%、「何となくいた」は宮教大生の男42.8%・女43.9%、一般大生の男36.3%・女43.4%であり、両大学生共に８割を超える家庭がそういう環境で過ごしていたようである。そういう存在はいなくて「役割分担でやっていた」としたのは宮教大生の男17.6%・女20.3%で、一般大生では男17.1%・女14.9%であった。学校種間を比較すると、有意ではないが宮教大生の方がやや大黒柱的存在の影が薄く、役割分担的家庭が多い傾向がみられた。

母親の就労状況では、最も多かったのは「昔も今も働いている」で、宮教大生の男67.1%・女66.0%、一般大生の男65.3%・女65.7%であり、次いで「最近就労はじめた」で約13～16%、「ずっと専業主婦」が約９～12%、「子どもの頃就労」が約７～10%であり、大学種間に差はほとんどみられなかった。

父親の子育て参加や家事への姿勢では、「よくしていた」としたのは、宮教大生の男35.8%・女34.2%、一般大生の男31.0%・女34.9%、「多少はしていた」は宮教大生の男47.2%・女37.9%、一般大生の男47.6%・女40.6%で、およそ７～８割の父親は子育て・家事に何らかの関わりをしている状況であった。大学種間にはほとんど差はみられなかった。

本人の家事参加については、「いつもしていた」としたのは、宮教大生では男27.5%・女22.8%、一般大生は男19.6%・女21.7%、「たまにしていた」は宮教大生の男53.1%・女66.3%、一般大生は男65.6%・女64.9%であった。大学種間では男子は宮教大生の方がやや参加傾向が高かったが女子には差はみられなかった。

3）自分の性に対する満足度について

「今の自分の性に満足しているか」の問いに対して「大いに満足」「まあ満足」「少し不満」「大いに不満」の４件法にて回答してもらったところ、男女差については宮教大・一般大ともに有意な差が認められたが、大学間にはほとんど差はみられなかった（図１）。以前何度か行った調査に比べると女子の満足度は上昇傾向にあるものの、今なお男子に比べると満足度は低いといえる。

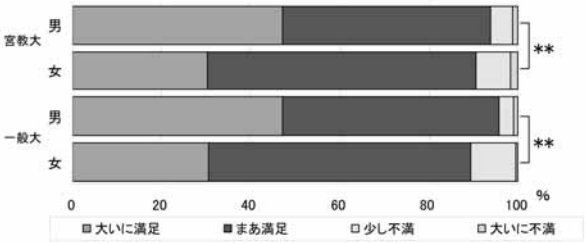

図１　自分の性に対する満足度

4）男／女らしさに関する意識と親のしつけ

男／女らしさに関する質問としては、①「自分のことを男／女らしいと思うか」、②「男／女らしくなることを意識することがあるか」、③「男／女らしくあるべきという考えに賛成か反対か」、④「両親はあなたを男／女らしく育てたと思うか」、⑤「他者から男／女らしくあれと求められた場合どう感じるか」の5問である。

①の男／女らしさの自己評価では、両大学種共に男子の方が有意に自己評価が高く、大学種間には差はみられなかった。②の問いでは「意識する」（よく＋たまに意識する）のは両大学種共に女子にその傾向が高く、また大学種間では男子のみ一般大生の方が有意に高かった（$p<0.05$）。③の問いで「賛成」（賛成＋まあ賛成）意見は両大学種共に男子の方は高かったが、大学種間に差はみられなかった。④の「親による男／女らしさ」の躾では、男女共に大学種間に差がみられ、一般大生の方にその傾向が強かった（男女共 $p<0.05$ 図２）。⑤については、両大学種共に男女差（$p<0.01$）がみられ、いずれも女子の方が抵抗感を感じていた。また、大学種間でみると、女子のみ宮教大生の方に抵抗感を示す者が有意に高かった（$p<0.05$　図３）。

5）性的役割分業と男女共同参画への意識について

「男は外で働き、女は家庭を守る」という考え方に対して、「賛成」は宮教大生の男8.2%。女2.0%、一般大生の男8.7%・女5.0%、「まあ賛成」は宮教大生の男30.4%・女30.1%、一般大生の男42.2%・33.1%であった。「やや反対」「反対」を合わせると宮教大生の男

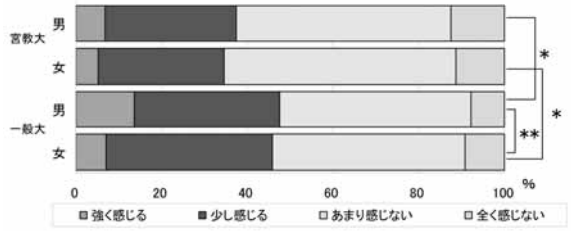

図２　両親はあなたを男／女らしく育てたと思うか

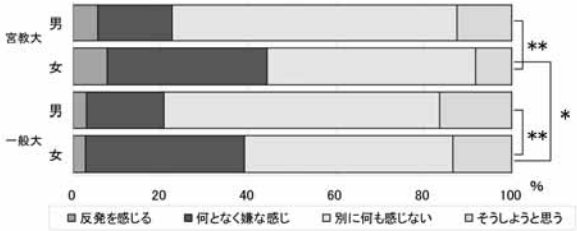

図３　他者から男／女らしくあれと求められた場合の印象

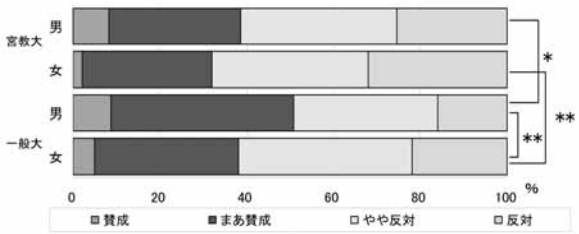

図４　性別役割分業の意識

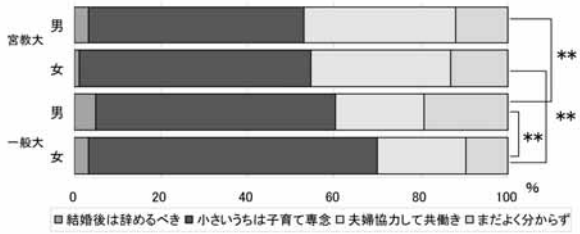

図５　家庭と共働きの意識

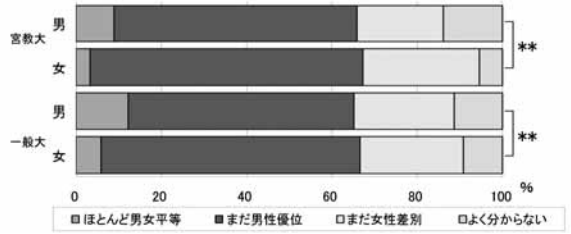

図６　男女平等社会に対する意識

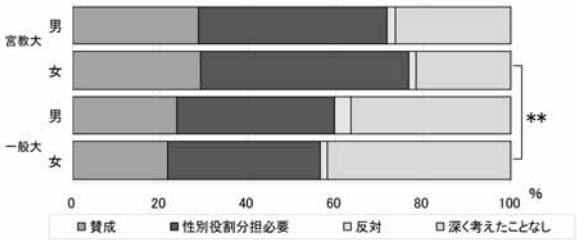

図７　「ジェンダー・フリー」社会の実現への賛否

61.4%・女67.9%で、一般大生は男49.1%と女61.8%であった。大学種間比較では、宮教大生の方が男女共に反対傾向が強かった（男 $p<0.05$・女 $p<0.01$　図４）。男女別では宮教大生ではそれほど差はみられなかったものの、一般大では男子の方が賛成傾向が強かった。

また、「将来家庭を持った場合、共働きをどう思うか」の問いでは、「女性は結婚後はやめた方がいい」が宮教大生の男3.2%・女1.2%、一般大生の男5.0%・女3.4%であり、「女性は子どもができたら少なくとも幼少期は子育てに専念すべき」が宮教大生の男49.7%・女53.5%、一般大生の男55.1%・女66.5%、「子どもができても協力して共働きすべき」は宮教大生の男35.0%・女32.2%、一般大生の男20.5%・女20.4%であった。男女共に宮教大生の方が共働き志向の意識は高い傾向にあるといえる（男女共 $p<0.01$　図５）。しかし、大学種を問わず、男女共に約半数が女性は就労よりも子どもができれば子どもの幼少期は子育てに専念すべき、と考えている者が多いことがわかった。

６）「男女平等社会の現状」と「ジェンダー・フリー」についての見方

自分の近未来への生活意識に対して「日本の男女平等社会の現状をどう感じるか」の問いでは、「ほとんど平等になっている」としたのは、宮教大生の男8.9%・女3.3%、一般大生の男12.3%・女5.8%と少なかった。「まだ男性優位の状況」としたのは宮教大生の男57.0%・女64.1%、一般大生の男52.8%・女60.8%であった。「いまだ女性差別社会」としたのは宮教大生の男20.3%・女27.3%、一般大生の男23.5%・女24.1%であった。「よくわからない」も10%前後あった。大学種間には有意な差はみられなかったが、それぞれ男女間には一定の差が見られた（図６）。「ジェンダー・フリー社会の実現」に対する賛否について尋ねた問いでは、「賛成」が宮教大生の男28.8%・女29.1%、一般大生の男23.8%・女21.6%、「男女対等はいいが性別役割分業は必要」が宮教大生の男43.1%・女47.5%、一般大生の男35.9%・女35.0%であり、「反対」はごく少数で

あった。他方、「深く考えたことがない」とした者も比較的多く、宮教大生では男26.3%・女21.7%、一般大生では男36.4%・女41.8%で、一般大生の方がジェンダー意識に乏しい傾向がみられた（図７）。

７）ジェンダーに関する情報と意識について

「高校までにジェンダーを意識する情報に出会ったことあるか」の問いでは、「あった」は宮教大生の男46.5%・女46.7%、一般大生の男26.7%・女33.9%、「なかった」がそれぞれ25.8%・20.9%と37.1%・28.7%であり、大学種間に明確な差がみられた（表１）。

ジェンダー関連の知識、たとえば「女性の参政権が認められたのはいつか」「国会議員に占める女性の割合はどれくらいか」「女性正規社員の平均賃金は男性の何%ぐらいか」といった問いや「主人・家内・奥さん・嫁といった言葉に違和感はあるか」といった問いに対する回答は表２のような状況であった。男女間・大学種間共に有意な差がみられたのは、「女性国会議員の割合」に関する回答であった。

８）これまでの学校生活とジェンダー意識

高校までの学校経験において「出席簿が男女別で男子が先だったことに違和感があったか」を尋ねた問いでは、「思ったことがない」が最も多く、宮教大生では男66.2%・女58.6%、一般大生は男64.6%・女62.9%、「思ったことがある」は宮教大生の男18.5%・女25.0%、一般大生の男11.9%・女17.6%で、宮教大生の方が男女共に違和感を多く感じていた。

「男が“君”で、女が“さん”の呼称についてどう思ったか」では、多くが「気にならなかった」で、宮教大

表１　ジェンダーに関する情報と出会った経験

%

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-私)	女(宮-私)
ジェンダー情報との接触								
あった	46.5	46.7	26.7	33.9		＊＊	＊＊	＊＊
なかった	25.8	20.9	37.1	28.7				
覚えていない	27.7	32.4	36.2	37.4				

＊＊:p<.01

表２　ジェンダー関連の知識

%

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-一)	女(宮-一)
女性の参政権								
明治後半	4.4	5.3	5.0	7.8				
大正中頃	10.0	8.6	10.0	12.3			＊＊	＊＊
昭和初期	15.6	23.8	30.5	33.1				
戦後	70.0	62.3	54.4	46.8				
女性議員の割合								
10%弱	62.5	49.2	44.9	36.7	＊	＊	＊＊	＊＊
20%程度	33.1	43.0	47.4	53.7				
30%強	4.4	7.8	7.7	9.5				
女性の賃金の比率								
93%	11.3	7.8	10.0	4.7				
81%	41.9	33.2	37.1	28.4		＊＊		
67%	38.8	46.7	42.1	50.9				
46%	8.1	12.3	10.7	16.0				
言葉と現実								
かなり違和感あり	2.5	4.1	3.0	2.1				
多少違和感あり	24.4	24.6	23.7	21.5				
別に違和感なし	73.1	71.3	73.3	76.4				

※各項目で欠損値あり　＊:p<.05、＊＊:p<.01

生の男85.4%・女82.0%、一般大生は81.0%・女85.0%で、男女差および大学種間の差はほとんどみられなかった。

「男女による制服やランドセル・上履きの色の違い」では、宮教大生に若干の男女差がみられた（女子の方がやや気になっている）が、大学種間では有意な差はみられなかった。大部分が「ほとんど気にならなかった」で、宮教大生の男87.9%・女76.2%、一般大生の男82.9%・女81.1%であった。

「保健・体育の授業や性の指導での男女別習」では、女子の大学校種間と一般大生の男女間に有意な差がみられた。だが「特に気にならなかった」が最も多く宮教大生の男56.7%・女54.7%、一般大生の男60.5%・女65.9%で、「かなり」と「多少違和感あった」を合わせても宮教大生の男33.2%・女38.6%、一般大生の男28.6%・女29.5%で、宮教大生の方がやや違和感を抱き、かつ共修を意識している者が多かった。

「家庭科における男女共修」に関しては、ほとんどが「当然共修であるべき」であったが、大学種間では男女共に有意な差がみられ、宮教大生の方がそれを当然とみなしている者が多かった。また「高校までの教科書で、記述や挿絵・執筆者に男女の差別や偏りを感じたことがあるか」の問いでは、「ほとんどなかった」が最も多く、宮教大生の男71.3%・女74.9%、一般大生の男71.2%・女78.6%で、「よくあった」「時々あった」を合わせても約20～30%で、全般にジェンダー感覚で教育内容を捉える意識は薄かったものと考えられる（以上、表３参照）。

高校までの学校体験の中で、担当された教員との関わりにおけるジェンダー問題について尋ねた。それは、①「進路指導において男女による扱いに差を感じたことはあるか」、②「クラブ活動や行事（運動会）・生徒（学級）会等で男女の扱いに差を感じたことはあるか」、③「教員の生徒への接し方（厳しさ・甘さ等）や将来への期待感等で男女差を感じたことはあるか」、④「小学校時代、担任が男／女（の性別）でよかったと思ったことはあったか」、⑤「高校までに“男／女らしさ”を求める教員はいたか」の５つの問いである。①と②に関しては両大学種の男女共に約50～60%台が「ほとんどなかった」としているが、両大学種共に男

表３　高校までの学校体験とジェンダー意識の割合

%

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-一)	女(宮-一)
性別と出席簿等の男優先への意識								
思ったことあり	18.5	25.0	11.9	17.6		＊	＊	＊
思ったことなし	66.2	58.6	64.6	62.9				
男女混合でなし	15.3	16.4	23.5	19.4				
性別と君・さんの呼称への意識								
気にならなかった	85.4	82.0	81.0	85.0				
多少気になった	12.1	13.5	14.6	10.8				
両方「さん」付け	2.5	4.5	4.3	4.2				
性別と制服等への意識								
とても気になった	1.9	2.9	1.4	2.6				
多少気になった	8.3	18.0	10.3	12.3	＊			
ほとんど気にならなかった	87.9	76.2	82.9	81.1				
男女区別なし	1.9	2.9	5.5	4.0				
性別と性指導の男女別習への意識								
かなり違和感あり	6.4	4.9	5.3	3.4				
多少違和感あり	26.8	33.7	23.3	26.1		＊＊		＊
特に気にならず	56.7	54.7	60.5	65.9				
全て共修	10.2	6.6	11.0	4.7				
性別と家庭科共修への意識								
当然必修	96.1	96.7	82.9	91.1		＊＊	＊＊	＊
男子は選択	2.6	2.5	13.7	7.9				
男子は技術科のみ	1.3	0.8	3.4	1.0				
性別と教科書の記述や挿絵への意識								
よくあった	5.7	2.1	2.3	1.1		＊		
時々あった	22.9	23.0	26.5	20.2				
ほとんどなかった	71.3	74.9	71.2	78.6				

※各項目で欠損値あり　＊:p<.05、＊＊:p<.01

表４　性別と教員におけるジェンダー的な対応の割合

%

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-一)	女(宮-一)
進路指導の先入観								
よくあった	16.7	7.9	14.2	4.4	＊	＊＊		
時々あった	32.7	31.0	35.4	32.5				
ほとんどなかった	50.6	61.2	50.5	63.1				
クラブ等での男女の扱い								
よくあった	12.7	5.8	8.7	5.2	＊	＊＊		＊＊
時々あった	29.9	36.6	35.4	25.8				
ほとんどなかった	57.3	57.6	55.9	69.0				
関わり方や期待感								
よくあった	21.2	14.5	20.6	9.7		＊＊		
時々あった	40.4	44.0	42.2	42.7				
ほとんどなかった	38.5	41.5	37.2	47.6				
担任が男/女で良かった経験								
よくあった	5.7	12.5	12.6	13.6	＊＊	＊＊	＊	
時々あった	17.8	29.6	21.2	31.0				
ほとんどなかった	76.4	57.9	66.2	55.4				
男／女らしさを求める先生								
よくいた	5.1	5.4	6.4	4.9				
少しいた	29.9	31.0	30.8	30.4				
ほとんどいなかった	65.0	63.6	62.8	64.7				

※各項目で欠損値あり　＊:p<.05、＊＊:p<.01

女間に有意差がみられた。③では「よくあった」と「時々あった」を合わせると、両大学種の男女共に約６割であり、「ほとんどなかった」を上回った。男女別では男子の方が「あった」とした者が多かったが、一般大生の男女間には有意な差がみられた。④では「ほとんどなかった」が両校種の男女共に過半数を占めたが、「あった」としたのは両校種とも男女差があり、女子にその傾向が強かった。⑤は「よくいた」が５％前後、「少しいた」が30％前後で、「ほとんどいなかった」が65％前後あり、大学種間・男女間共にほとんど差はみられなかった（以上、表４参照）。

４．性差観スケールと第二次調査

第一次調査では、伊藤裕子の性差観スケール（尺度）30項目[9]（末尾の参考資料参照）を用いて宮教大と一般大の調査対象者にアンケートを行った。第二次調査では、そうした性差意識と他の要因（親の子育て意識・男／女らしさ意識・性への態度・行動等）との関係を調査するため、30項目のうち類似項目を削減し15項目の短縮版尺度とし、内的整合性の検討（クロンバックのα係数）を行い、その信頼性の上に他要素との相関的検討を行った。

１）一次調査における性差観スケール

一次調査で行った30項目の平均得点は、宮教大生の男68.2±14.7点・女67.8±12.8点であり、一般大生の男73.５±13.4点・女72.0±12.2点であった。大学校種内の男女間に有意な差はみられなかったが、大学校種間には男女共に有意な差が認められた（p<0.001）。すなわち、一般大生に比して男女共に宮教大生の性差意識は低いことがわかった。

各項目毎のデータを示すと表５・図８のようになる。男女間および大学種間で比較をしてみると、次のような傾向がみられる。男女共にほとんどの項目で宮教大生の方が性差意識が低くなっているが、男女共に大学種間で有意な差がみられた（宮教大生の方が「そうは思わない」とした）項目は30項目中、次の10項目であった。「子どもを預けてまで母親は働くべきでない」「女性の思想家は出にくい」「セックスは男性が

9　伊藤裕子「高校生における性差観の形成環境と性役割選択―――性差観スケール（SGC）作成の試み」『教育心理学研究』45 p396-404　1997

表５　性差観尺度の性及び大学での比較

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-一)	女(宮-一)
男性と人使い	1.91	1.71	1.96	1.92	＊			＊＊
女性のお茶	2.37	2.02	2.50	2.23	＊＊	＊＊		＊＊
母親の就労条件	2.57	2.17	2.76	2.35	＊＊	＊＊		＊
女性は臆病	1.55	1.64	1.73	1.74			＊	
男性と性欲	2.73	2.98	2.91	3.13	＊	＊＊		＊
管理と女性	2.16	2.15	2.34	2.29				
女性の思想家	1.69	1.72	2.01	1.95			＊＊	＊＊
女性と不適な職業	1.94	1.82	2.15	1.94		＊＊	＊	
体力と男性優位	1.89	1.97	2.16	2.08			＊＊	
男性と女性は異なる	3.23	3.24	3.11	3.28		＊＊		
セックスと男性リード	2.05	2.31	2.24	2.45	＊＊	＊＊	＊	＊
女性は視野が狭い	1.57	1.56	1.75	1.64		＊	＊	
中学での男子の成績	1.72	1.74	1.70	1.76				
経済力と男性失格	2.85	2.74	2.91	2.72		＊＊		
女性の月経と精神	2.42	2.59	2.62	2.85		＊＊	＊	＊＊
女性と責任回避	1.71	1.84	1.93	1.99			＊＊	＊
精悍な体つきと男の魅力	2.80	2.70	2.79	2.76				
夫を立てるべき	2.25	2.65	2.47	2.80	＊＊	＊＊	＊	＊
男性と弱音	2.75	2.19	2.91	2.36	＊＊	＊＊		＊
男性と身長	2.30	2.22	2.39	2.33				
論理的思考と男性	1.91	1.97	2.06	2.06				
頼りは男性	2.00	2.29	2.31	2.54	＊＊	＊＊	＊＊	＊＊
女性は感情的	2.46	2.64	2.65	2.89		＊＊	＊	＊＊
子育てと女性	2.60	2.46	2.74	2.57		＊＊		
女性は手先が器用	2.58	2.24	2.61	2.53	＊＊			＊＊
仕事で男性と互角	1.93	1.89	2.15	2.08			＊＊	＊＊
冒険心と男性	2.45	2.27	2.87	2.41		＊＊	＊＊	＊
女性とタバコ	2.86	2.92	3.06	2.86		＊＊		
自分優先は母親失格	2.83	2.89	3.11	3.00		＊	＊＊	
男性は攻撃的	2.27	2.28	2.52	2.47			＊＊	＊＊

＊:p<.05、＊＊:p<.01

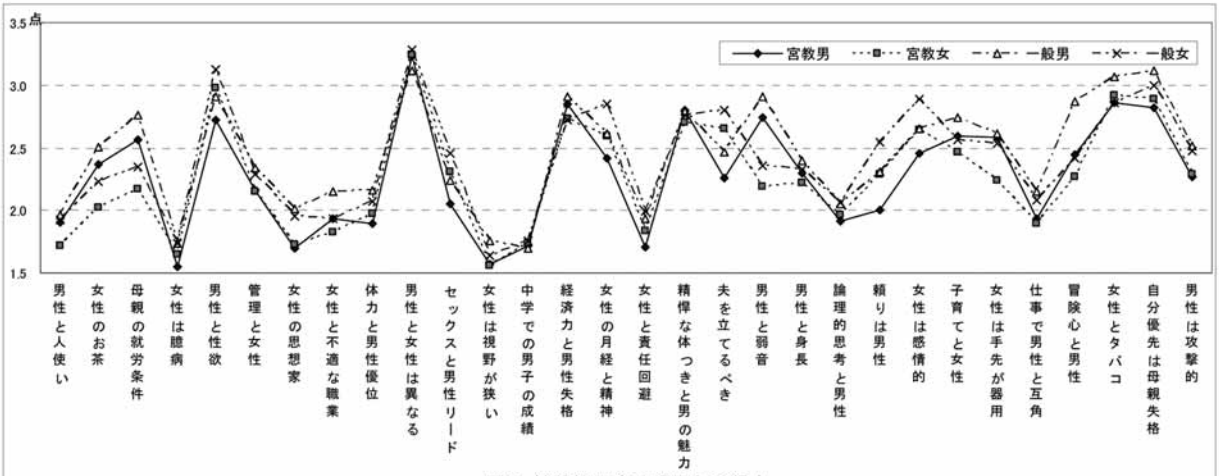

図8　性差観尺度の項目毎の得点

リードすべき」「女性は月経があるので精神的に不安定」「人前では妻は夫を立てるべき」「最終的に頼りになるのは男性」「女性は男性より感情的」「女性は出産があり仕事で男性と対等は無理」「冒険心やロマンは男性のよりどころ」「男性は女性より攻撃的」である。大学種にかかわらず（宮教大・一般大共に）男女で大きく差がみられたのは、「女性の入れたお茶はおいしい」「子どもを預けてまで母親は働くべきでない」「男性の性欲は女性より強い」「セックスは男性がリードすべき」「人前では妻は夫を立てるべき」「男は弱音を吐くべきでない」「最後の頼りはやはり男」であった（図８）。

2）二次調査における短縮版性差観スケール

伊藤裕子の性差観尺度30項目のうち、内容的に類似し重複していると考えられる項目を半分削除し、15項目の短縮版（末尾参照）にし、その信頼性を高校生1,190名、大学生1,053名の計2,243名の調査で検証した結果、α係数0.802を得たため内的整合性があるものといえる。

この15項目で、一次調査の翌年にも改めて大学種間の男女比較、同大学種内の男女比較を試みたところ、総合得点では一次調査とほぼ同様に、宮教大生の男女には差はみられなかったが、一般大生の男女間、大学種間の男女それぞれに有意な差がみられた（表６）。

個別の項目で大学種間に男女共に差がみられたのは、「家庭の管理はやはり女性」「セックスは男性がリードすべき」「女性は月経があり不安定だ」「最後の頼りはやはり男」「女性は感情的だ」「女性は仕事で男と互角は無理」「子どもより自分を優先する母親は失格」の８項目であった（表７）。

3）性差意識と関連要因との相関

この性差意識と関係があると思われる性意識・性行動との関係をみると次のような傾向がみられた。自分の性（男または女）に「満足している」群と「満足していない」群とで性差観得点を比較してみると、男子では差がみられなかったものの、女子では満足群の方が性差観尺度得点は高かった（表８）。また、親の養育態度で「親から男／女らしく育てられた」とした群とそうは思わない群とで性差観得点を比較したところ、「男／女らしく育てられた」とした群の方が男女共有意に性差観得点が高かった（表９）。さらに、性交経験の有無と性差観との関係では、経験群の方が男女共に性差観得点が有意に高かった（表10）。

5．宮教大における「性・文化・ジェンダー」の授業とそれによる意識の変化

2007年度より「性・文化・ジェンダー」の授業を学内７名の教員と１名の外部講師（産婦人科医師・女性クリニック院長）の８名で開講した。主な内容は、生

表６　性差観尺度（短縮版）の総合得点

N(人)		平均±SD(点)	検定
宮教大	男 183	36.8±7.58	宮(男-女)
	女 278	36.6±6.81	一(男-女)
一般大	男 297	40.0±7.35	男(宮-一)　＊＊
	女 295	39.7±7.11	女(宮-一)　＊＊

＊＊:p<.01

表７　性差観尺度（短縮版）の性及び大学での比較

	宮教大		一般大		検定			
	男	女	男	女	宮(男-女)	一(男-女)	男(宮-一)	女(宮-一)
管理と女性	2.03	2.09	2.32	2.26			＊＊	＊
セックスと男性リード	2.21	2.44	2.46	2.62	＊＊	＊	＊＊	＊
経済力と男性失格	2.84	2.38	3.00	2.67	＊＊	＊＊		＊＊
女性の月経と精神	2.42	2.70	2.82	2.91	＊＊		＊＊	＊＊
精悍な体つきと男の魅力	2.77	2.60	2.82	2.65	＊	＊		
夫を立てるべき	2.31	2.56	2.52	2.83	＊＊	＊＊	＊	＊＊
男性と弱音	2.73	2.14	2.87	2.33	＊＊	＊＊		＊
論理的思考は男性	2.00	2.14	2.16	2.22				
頼りは男性	2.17	2.32	2.51	2.72		＊＊	＊＊	＊＊
女性は感情的	2.42	2.77	2.70	2.92	＊＊	＊＊	＊＊	＊
子育てと女性	2.54	2.45	2.53	2.64				＊
仕事で男性と互角	2.09	2.08	2.44	2.45			＊＊	＊＊
女性とタバコ	3.04	2.83	3.18	2.95	＊	＊＊		
自分優先は母親失格	2.83	2.91	3.09	3.11			＊＊	＊＊
男性は攻撃的	2.43	2.24	2.53	2.45	＊			＊＊

＊:p<.05、＊＊:p<.01

表８　性差観尺度（短縮版）と性別満足度

N(人)		平均±SD(点)	検定
満足群男	903	38.9±8.02	＊＊
不満群男	54	38.4±7.65	
満足群女	1095	39.4±7.25	
不満群女	155	37.1±7.78	

＊＊:p<.01

表９　性差観尺度（短縮版）と親の養育状況

N(人)		平均±SD(点)	検定
性差的養育群男	481	40.5±7.67	＊＊
平等的養育群男	491	37.4±8.07	
性差的養育群女	580	40.5±6.99	＊＊
平等的養育群女	688	37.9±7.43	

＊＊:p<.01

表10　性差観尺度（短縮版）と性交経験

N(人)		平均±SD(点)	検定
経験群男	374	39.7±7.92	＊
未経験群男	577	38.4±8.00	
経験群女	450	39.9±7.34	＊＊
未経験群女	729	38.4±7.38	

＊:p<.05、＊＊:p<.01

物学・社会学から見たジェンダー、文化（児童文学・音楽・舞踊・美術・スポーツ）からみたジェンダー、学校教育の現状から見たジェンダー問題等、についてである。

１）授業前後によるアンケート調査から

2008年度（開講２年目）の講義（受講生92名）の際に、初回と最終の15回目に、92名の受講者にジェンダー意識に関する同一アンケート調査を行なった。その結果は、次のようであった。

本授業の主要な中身が各種文化とジェンダーという点にあったため、必ずしも性差観尺度の調査内容と合致するものでなかった面はあるが、男子では授業前は67.9±9.5点だったのが授業後は67.6±15.2点とほぼ変化しなかった。女子では64.7±11.2点から61.6±17.4点とやや低下をしたものの有意な変化ではなかった。また、男女比較では女子の方が性差意識が低いこと、そして男女共に講義による揺さぶりからか標準偏差のばらつきが増していることがわかる。30項目の個々で見ると、男子は性差観スケールの15項目において低下し、女子は20項目において低下しているが、それらも有意な変化ではなかった。

２）授業前後の学生の感想文から

また、初回の授業後に書かせた感想文と最終（15回目）の授業後に書かせた感想を紹介する。

初回の授業時の何人かの感想から

「私はジェンダーについてほとんど無関心だったので、今日の導入の授業を聞いていろんな気づきがありました。たとえば、学校での名簿があるときから混合になったし、小学校時代にあるときから男の子にも急に“さん”付けになったりして不思議に思ったことがあったけれど、それがジェンダーが社会に広がった時代だったのだと思った。これまで“家内”とか“奥さん”“主人”と呼んでいた人たちはジェンダーを意識したとき何て呼ぶのだろうと思った。でも、ジェンダーにセンシティブになることはいいことだし、教師になりたいと思っているので、これからの授業でいろいろと考えてみたい。」（女子）

「私はこれまでジェンダーについて考える機会はほとんどなかった。高校までの教育の中でほとんど取り上げられてこなかったからである。今日の授業を聞いて、改めて自分のこれまでを振り返ってみると、確かに性についての社会・文化的問題がいろいろありそうである。身の回りの小さい問題から大規模な社会的問題まで、体験的にもいろいろ考えられそうである。この授業を通して、そうした問題を振り返り、あるべき姿というものについて考えてみたい。」（男子）

「これまでジェンダーについて深く考えたことはないのですが、ジェンダー・フリーということを私は“性にとらわれない”という程度に考えてきました。私自身“女らしくしなさい”といわれるのが嫌いなので、ジェンダーに関心はあります。ただ、ジェンダー

というのはそうした男／女らしさという個人的問題だけでなく、社会的な男女のあり方や性役割の問題でもあるということなので、社会の中での男女の問題や芸術や音楽・スポーツといった文化の中の問題についても客観的な問題として勉強できればと思う。」（女子）

「ジェンダーということばをはじめて知ったのは、中学の社会化の授業だったと思う。でも男子校だったので深く考えようとしなかった。だから今も深い議論にはついていけない。ジェンダーについて追求していくと、自分のこれまでの考えや使う言葉さえ変えなければならなくなりそうで、怖い一面もある。難しくて触れづらいテーマだけれど、教員となり人間を育てていく立場を目指す者として個人体験を超えた歴史や客観的な考え方、ものの見方をしていくための大事な課題についての学びだといえよう。」（男子）

「子どもを産むこと・育てることはすばらしいことなので、仕事を続けるうえでは負担だろうが、それをマイナスには受け止めたくない。私は自分の性に不満はないが、性によって不利になることや理不屈な状況があるなら、それを改善していく社会的努力も必要だろう。男女共同参画の意識はまだまだ社会の中に染み付いていないが、そうした社会的視野でジェンダー問題を考えていくべきだと思う。」（女子）

「今日の講義で自分の中にこれまで意識していなかったジェンダー感覚があることに気づかせられた。ある種の女性に“女らしくしろよ”と思ってしまう自分がいるし、“男は仕事、女は家庭”と思ってしまう意識が自分のどこかにあった。これらの感覚は、これまでの自分の育ちの中で自然に培われてきたものであろう。女性にだって働く権利はあるし、“男らしくしろ”といわれると嫌な面もある。染み付いたジェンダー意識を抜け出すのは容易ではないが・・・」（男子）

最後の授業における学生の感想から

「これまでジェンダーの授業を受けてきて、漠然とジェンダー・フリーは大事だと考えてきたけれど、そう単純ではないというか、もっと深く考えるべきだと思うようになりました。ジェンダー・フリーの必要なこともあれば、文化的な面から見ると男女の個性的なことは重要であることが理解できた。これから教員になることを考えると、そういうことを少しでも意識できたら男女のいる子どもたちにうまく対応できるのではないかと思います。」（女子）

「今日の講義を聞いて、男女の性差における社会的地位の問題や見方の問題が根強く残っていることを痛感した。私はこれまでジェンダー意識が極めて薄く、あまり違和感も感じてこなかったけれど、ジェンダー問題になりうることが沢山あることに気づいた。もし教師になったときに、今までの自分だと固執した経験的な男女の概念で接し、ジェンダー意識もなく押し付けるようになったかもしれない。これからは多面的で柔軟な視点と考えのもとにジェンダーにセンシティブになりたいと思う。その意味でこの授業は大変参考になった。」（男子）

「学校教育におけるジェンダー問題は、教師を目指している私たちにとってはきわめて重要な課題だと思います。改めて考えてみると、学校とジェンダーの問題は深く関わっています。出席順や体育の別習など、男女の性差を意識した問題がたくさんあります。子どもの時のしつけや教育は大人になっても影響します。小さいときに男女の区別を明確にした環境で育つとそれが当然のようになるでしょう。途中からではジェンダー・フリーの意識は育たないと思います。だから、幼稚園や小学校時代から男女の性差意識を持ち込まない教育が大切だと思います。」（女子）

「私の高校時代は、名簿は女子が先でした。また座席が男女まったく関係なく決めたり、体育も男女混合でした。だから、却ってあまりジェンダーを意識してこなかったと思います。今から考えると、この高校の先生たちは、ジェンダーを意識して運営していたのだろうと思います。このような性にとらわれない教育は、これからは意識的に考えなくてはならないし、広げるべきなのだろうと思います。そのためにも、教員を目指す者にはこうした学習が必要なんだろうと思います。」（女子）

「過去を振り返ると、自分のジェンダーに関する意識は、親と教師によりすり刷り込まれてきた気がする。“男子は女子に暴力を振るってはいけない”と先生から言われたことがあるが、これは愚かな発言だと思う。男だから女の子に、ではなくて暴力がいけないのだ、と教えるべきだろう。教師は子どもたちに強く影響を与える存在である。その教師がジェンダーにとらわれていては子どもたちに誤ったジェンダー観を育ててしまうであろう。」（男子）

６．要約と考察

2007年（一時調査）と2008年（二次調査）に宮城教育大学学生と一般私立大学学生に、ジェンダーに関する調査を行い、その比較を通して教員養成大学学生のジェンダー意識に関する特徴と課題についての一定の知見を得たので、次にその要約を示す。

①子どもの頃の生育環境では、男女共に大学種間にたいした差はみられなかったものの、一家の大黒柱的存在が「明確にいた」としたのは一般大生の方が多く、「何となくいた」と「家族の役割分担だった」としたのは宮教大生の方が多かった。大学種間に差はなかったものの、母親の就労が「昔も今も」とした者が全般に７割弱いたのは今日的な生育環境を示していよう。

②自分の性に対する満足度については、両大学種共に男女差がみられ、女子は男子に比べ満足度が低かったが、大学種間には有意な差は認められなかった。

③「男／女らしさ」に関連するいくつかの問いの中では、大学種にかかわらず男子の方が有意に高かったのが「自分を男／女らしいと思う」「男／女らしくあるべきに賛成」であり、女子の方が有意に高かったのは「男／女らしさを意識することがある」「男／女らしくあれに抵抗感がある」であった。大学種間で差がみられたのは、「親が男／女らしく育てた」とした者は一般大生の方が男女共に有意に多く、「男／女らしくあれに抵抗感がある」とした女子同士では宮教大生の方が有意に多かった。

④性的役割分業意識（男は外で働き、女は家を守る）は、男女共に一般大生の方が高く、宮教大生は批判的な者が多かった。しかし、将来の共働きについて、「子どもができれば女性は子育てに専念すべき」とした者は、宮教大生は一般大生に比べやや少ないものの男49.7％・女53.5％と半数前後いた。「夫婦が協力して共働きすべき」とした男女共同参画の意識は、一般大生に比べて多く、男35.0％・女32.2％であった。

⑤今日の「社会の男女平等の現状」をどう見るかの問いでは、大学種間には有意な差はみられなかったものの、「改善はあるがまだ男性優位社会」＋「いまだ女性差別社会」とした者は宮教大生の男子77％、女子91％と高かった。ジェンダー・フリー社会の実現への賛否の意識では、宮教大生では男女共に約30％弱が明確な賛成としたが、約45％が「男女対等はいいが性別役割は必要」としており、この「フリー」の解釈による相違があるものと思われた。「深く考えたことがない」は宮教大生は２割台であったが、一般大生は約４割前後あり、まだまだ意識化が進んでいない傾向がみられた。

⑥高校までにジェンダーを意識する機会があったかどうかでは、宮教大生の方が有意に多かったものの、ジェンダーに関連する社会的状況の知識や社会的通年になっている「奥さん」や「主人」といったジェンダー用語に関してのセンシティブさはきわめて低い傾向であった。

⑦また高校までの学校生活経験の中での「出欠簿の順」や「君・さんの呼称」「男女の制服やランドセル・上履きの色」「教科書の記述や挿絵・執筆者」に関しての意識は、両大学種間に有意な差はなく、共に気にかけていなかった者が大半であった。「保健・体育や性の指導等での別修」や「家庭科の共修」に関しては宮教大生の方が、前者には違和感を、後者には当然とした者が多く、比較的ジェンダー感覚のある者が多かった。また、高校までに接した教員のジェンダー感覚を聞いた問いでは、男女による扱いの差はかなりみられたが、大学種間による差異はほとんどみられなかった。

⑧性差観調査では、宮教大生の方が男女共に有意に性差意識が少ない傾向がうかがえた。30項目の総合得点は宮教大生が男68.2点、女67.8点に対して一般大生は男73.5点、女72.0点であった。個別の項目でみると、宮教大生の方が性差観スケールの低かった項目は、「子どもを預けてまで女性は働くべきでない」といった職業と家事・子育てに関わる問題と、月経等の女性の生理機能・感情機能等によるハンディーに「そうは思わない」とした者が多かった。また、二次調査で行った短縮版の性差観尺度による15項目の調査では、その結果と性意識・性行動の項目との相関関係について検討してみた。その結果、15項目にしても、第一次調査と同様に、宮教大生の方が一般大生に比べて男女共に性差意識は低く、また宮教大生の男女間にも有意な差はみられなかった。自分の性に満足している者と満足していない者の性差観得点を比較すると、女子のみ満足群の方が性差観尺度点数は有意に高かった。また「親から男／女らしく育てられた」とした群は、男女共に有意に性差観得点が高かった。さらに性交経験の

有無との関係では、性交の経験群の方が性差観得点が有意に高い傾向がみられた。

これまで検討されたことのない教員養成大学学生のジェンダー意識を探るため、宮城教育大学学生と一般大学生の意識を比較する２年間（2006年・2007年）にわたる調査を実施した。同時に、2007年度より「性・文化・ジェンダー」の授業を開講し、実践的に学生のジェンダー意識を探る努力を行ってきた。

先に要約したように、宮城教育大学生のジェンダー意識は、一般大学生に比べると、生育環境では、やや家族分業的家庭で育ち、親のしつけも「男／女らしさ」を意識させられない育ちをしている傾向があった。とりわけ、女子に「らしさの強要に抵抗を感じる」学生が多かった。こうした育ちの環境によるジェンダー意識は、意識している、していないに関わらず性的役割分業意識に反映し、男女共同参画志向の意識に反映しているのかもしれない。ただ、「子どもができたら女性は幼少期は家事・子育てに専念すべき」という意識が男女共に約半数いる点について、教員養成大学としてどう考えるかは検討課題であろう。教職に就いた場合、一時退職するとなかなか復職することは困難な状況にあって、育児休業制度の充実や保育所の拡充などの社会面への意識化や「男の家事、育児」への参画意識も育てていく必要があろう。

高校までにジェンダーを意識する機会があったかの問いでは、宮教大生の方が有意にその機会があったようであるが、社会的通念（主人・奥さん等）や学校生活における性差上の区別や隠れたカリキュラム（hidden curriculum）に関してはそれほどセンシティブに意識されてはいなかった。こうした点に、今後の教員養成教育の中での課題があるものと考えられた。

性差観意識の調査では、宮教大生は男女共に一般学生に比して性差観意識は有意に低いという傾向があり、これは教員養成教育の成果というよりは、教員を志望する学生の意識、その背景には親の子育て意識等が反映した結果といえよう。しかし、この傾向は教員を志望する学生の資質としては、一定のプラス評価ができるものと考えられる。大学のカリキュラムに、ジェンダーに関連する講義科目を開設し、実践的に学生のジェンダー感覚を耕していきたいとの思いで３年目の実践を行っている最中であるが、１コマ１コマの講義の中で、学生の学びを確かめ、学生と共に創り出していくような取り組みを積み重ねたい。

また、ジェンダー意識の高まりは、自らの生き方や健康とどのように関わり、性自認や性の自己肯定感、異性との関係性の構築等に寄与するか、そして豊かで、安心してみていられる性行動に繋がるか、というような課題をも意識しながら更なる研究と実践に励みたいと思う。

謝　辞

仙台市内にある一般私立大学でのアンケート調査に尽力いただいた中條多美子先生（東北学院大学）と中島千恵子先生（東北工業大学）に厚く感謝申し上げる。また、調査に協力いただいた学生諸君にも心より感謝を申し上げる。

参考文献等

・伊藤常久・土井豊・数見隆生「高校生・大学生のジェンダー意識の検討～性差観尺度をもとにした比較」東北学校保健学会誌第57号　p23-24　2009.9
・土井豊・伊藤常久・中條多美子・数見隆生「大学生のジェンダー意識の現状(1)～一般大学生のジェンダー意識とその背景」日本学校保健学会講演集Vol49 p235 2007
・数見隆生・伊藤常久・中條多美子・土井豊「大学生のジェンダー意識の現状(2)～教員志望学生のジェンダー意識と学校経験」日本学校保健学会講演集　Vol49 p236　2007
・数見隆生・村口喜代「宮城教育大学における人間と性の授業」（授業テキスト冊子）第１－３集　1994-2005年
・数見隆生ほか『宮城教育大学における性・文化・ジェンダーの授業』教材・資料集　全81ページ　2007
・数見隆生ほか『宮城教育大学における性・文化・ジェンダーの授業』実践報告集　全52ページ　2008
・ハンエローレ・ファウルシュティヒ著・池谷壽夫訳『ジェンダーと教育』青木書店　2004
・鍋島祥郎　『高校生のこころとジェンダー』解放出版社 2003
・高橋　準　『ジェンダー学への道案内』北樹出版　2006
・浅野富美江　「性の自己決定能力獲得の課題～性とジェンダーの学習こそ」季刊『SEXUALITY』2001・3
・船橋邦子『ジェンダーと人権』解放出版社　2003
・松本清一『生きる知恵としての性教育』自由企画・出版

2009
・亀田温子ほか『学校をジェンダーフリーに』明石書店 2001
・江原由美子ほか『ジェンダーの社会学』新曜社　1989
・藤田英典ほか『ジェンダーと教育』世織書房　1999
・小川真知子ほか『実践 ジェンダー・フリー教育』明石書店 1999
・伊藤裕子「高校生における性差観の形成環境と性役割選択－性差観スケール作成の試み」『教育心理学研究』No45 1997
・木村涼子『学校文化とジェンダー』勁草書房　2006
・天野正子・木村涼子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社　2005
・須藤　廣『高校生のジェンダーとセクシャリティ』赤石書店　2005
・若桑みどり・加藤秀一・皆川満寿美・赤石千衣子『「ジェンダー」の危機を超える！』青弓社　2006

参考資料（伊藤裕子による性差観尺度30項目・○印項目は数見らによる短縮版15項目）

1．男性は女性に比べ、人を使うのが上手である
2．女性が入れたお茶は、やはりおいしい
3．子どもを他人に預けてまで母親が働くことはない
4．女性は男性にくらべて臆病である
5．男性の性欲は、概して女性に比べて強い
○6．家庭のこまごました管理は、女性でなくてはと思う
7．女性のすぐれた思想家はあまり出ない
8．女性は体力や精神力の点でパイロットなど人命を預かる仕事には向かない
9．体力において男性がまさる以上、社会のあらゆる場で男性が優位な地位を占めるのはやむを得ない
10．男性と女性は本質的にちがう
○11．セックスにおいて男性がリードするのは当然である
12．女性は男性に比べ視野がせまい
13．中学生になると、男の子の成績の方が伸びる
○14．一家の生計を支えられない経済力のない男は失格である
○15．女性は月経があるので精神的に不安定である
16．女性は何かにつけて責任を回避しがちである
○17．たくましい精悍な体つきは男の魅力として重要である
○18．人前では、妻は夫を立てた方がいい
○19．男はむやみに弱音を吐くべきではない
20．男は背が高くなければ、と思う
○21．論理的思考は、男性の方がすぐれている
○22．最終的に頼りになるのは、やはり男性である
○23．女性は男性に比べ、感情的である
○24．子育ては、やはり母親でなくてはと思う
25．女性は男性に比べ、手先が器用である
○26．女性は出産する可能性があるため、男性と仕事の上で互角に並ぶのは無理である
27．冒険心やロマンは、男性の究極のよりどころである
○28．女性が人前でタバコを吸うのは好ましくない
○29．子どもより自分のことを優先する女性は母親失格だ
○30．男性は女性に比べ、攻撃的である

（平成21年９月30日受理）